



写真19 第5主体



写真20 第6主体

III 古墳時代

10 鳥居遺跡

所在地 出石町鳥居、1933年(昭和8)12月、出石川にかかる鳥居橋架橋工事に際して、現川床より約5m下から出土したものである(図33)。



図33 位置図

ラッパ状に開く口縁部をもつものである。口縁部内外面は、ヨコナデ、胴部外面は全体にヘラミガキが施され、内面の颈部と胴部にはハケ調整が行われている。残存高17.1cm、口径10.3cm、底径3.0cmをはかる。胎土はよく焼成は良好、胴部中下半に黒斑が見られる。色調は灰褐色を呈する。

付近の遺跡としては、東に出石神社遺跡、宮内遺跡、宮内黒田遺跡、上坂遺跡、西に西の谷遺跡などの弥生時代の遺跡が点在する。また、古墳として東谷古墳、尾崎古墳群が丘陵上に立地している。

遺物

壺(図34)

壺は小さな底部から胴部の張る算盤玉の形を呈し、細い颈部から、

土器の製作年代は、古墳時代^注前期と考えられる。

遺物は、浜坂町在住の山本茂信氏が所蔵されている。

注 石野博信「但馬の古式土師器」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第3集 1976年

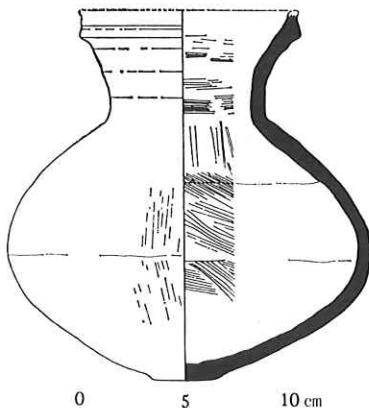


図34 壺

11 田多地小谷遺跡

所在地 出石町田多地字小谷に所在する。出石町の最も北に位置し、豊岡市との市町境に近く、南へ張り出す尾根の南斜面、六方川河床に遺跡はある（図35、写真21上）。



図35 位置図

1980年（昭和55）8月30日、田多地の六方川災害復旧工事地区内において、工事中に古墳時代に属する土師器が多量に出土した。その連絡を受けた兵庫県教育委員会は工事主体者である兵庫県豊岡土木事務所と直ちに遺跡の取り扱いについて協議を行い、県教育委員会が調査主体となって発掘調査を

実施したものである。この報告は、森内秀造他「田多地小谷遺跡」兵庫県教育委員会1983年の抜粋である。

調査は、堤防の災害復旧工事中における河床中の緊急発掘調査が行われた。具体的には約 200 m^2 にわたり、3回に分けて土層観察等の予備調査、その予備調査にもとづきトレンチによる発掘調査が実施された。調査の結果、土器を多量に包含する旧流路が確認された。調査は復旧工事用瀬替水路を第I区とし、六方川河床中に第II、III、IV区のトレントを設定した（図36）。

1. 遺構（図37、写真21中）

古墳時代前期の流路

調査の結果、基本的な層序は上から(1)表土層（積み土等）、(2)暗灰褐色中粒砂層（シルト混じり）、(3)黒褐色粗粒砂層（シルト混じり）、(4)暗灰褐色中粒砂層（無遺物層）、(5)腐食土層（無遺物層）となり、この内、第2層中には奈良時代に属する須恵器を含み、第3層からは古墳時代前期の遺物が大量に含まれていた。

遺構の直上を流れる六方川は後世の付替水路であると言われており、遺跡が南に面した谷の開口部に立地することから、当初、この黒褐色粗粒砂層は背後の谷から流失して河道内に堆積したものと考えられたが、上記した堆積

土層の状況から平野部の自然流路の堆積状況を示していると思われ、むしろ、この黒褐色粗粒砂層は現在の六方川の下をかつて流れていた旧流路内に堆積したものと考えられた。そして、この第3層は流路内にレンズ状に堆積したものと推測される。そのような調査の結果から作成したものが、図37の遺構推定図である。

井戸状遺構

第1区中央北側壁面・第2層暗灰褐色中粒砂層（シルト混じり）中に板枠を組んだ井戸状遺構が発見された。井戸状遺構といつても簡単な集水池のようなものである。井戸の大きさは一辺 50cm、高さ 40cm 程のもので、井戸は単に板で四方を囲む構造のものである。板枠については一枚板で組み合わせるための細工はしていない。掘り方の規模は底辺 1m、深さ 0.55m に達する。井戸の掘り方の土層は、第2層の下から古墳時代前期の第3層、黒褐色粗粒砂層を切っている。所属する時代としては、奈良時代に属するものであろう。なお、この井戸は断面に露呈しただけであるため完掘はせず、保存のため埋め戻された。

2. 遺物（図38～56、写真21下・22～27）

(1) 土師器

発掘調査面積約 200m² に対して、土器の出土量はコンテナ80箱に達する。そのほとんどが黒褐色粗粒砂層から出土した土師器である。調査面積に対して遺物量がきわめて膨大である。しかも遺物は一括遺物が多く、完形品も少なくない。出土遺物について、各トレンチの間で、その器形、器種構成について差異は認められなかったので、ここでは各トレンチの出土遺物を一括して、器種ごとに分類した。

甕 A

二重口縁部をもつものである。口縁の幅が広く、口縁下端部が突出し、肩がやや張るタイプのものを A₁、口縁は幅が短く厚手につくられており、肩の張りの少ないものを A₂とした。大きさはこの二つに分けられるが、両者のタイプを折衷したようなものがあり、これについては A₁ の形態に近いものを A'₁、A₂ に近いものを A'₂ としたが、その区別については必ずしも厳密ではなく、あくまで便宜的なものである。

甕 A₁ (1～22)

鳥取県など山陰地方に特有の二重口縁をもつ一群である。幅の広い外反する口縁をもち、口縁下端部は鋭く突出する。口縁端面は平坦で外方に拡張するものが多い。口縁内外面とも丁寧に横ナデを施す。体部内面については、上半部は横方行の削りを行い、下半部は下方から削り上げている。器壁は全体に薄く仕上げる。体部は倒卵形になるものが多いが、18は器高にたいして胴径が広く球形に近い。底部は丸底である。21のように平底にするもの^{注1}があり、鳥取県秋里遺跡や長瀬高浜遺跡に類例がある。^{注2}20は口径が30cm近くなる大型の甕である。外面には煤が付着する。22はやや大型の器形で肩部に櫛描直線文と櫛描波状文を施す。甕A₁^{注3}についてはその形態、手法上の特徴から青木VII期（布留式併行期）に併行するものと思われる。

甕 A₂ (23~41)

甕A₁に比べて口縁が短く厚手を作る。口縁外面は強い横ナデにより四部をつくっている。口縁は外反し、端部は丸くおさめる。肩の張りは少なく、全体に小型である。ハケは縦方向に施すものが多い。頸部の屈曲が長く、口縁を短く直立させるもの（30~33）もある。

また、内面の削りの位置によって甕A₂は2つのタイプに分かれる。すなわち削りの位置が低く、頸部内面がゆるやかに屈曲し口縁部に続くもの（23~33）と削りの位置が高く頸部内面に鋭い稜をもつものの（34~41）がある。後者は肩の張りがほとんどなく、体部は頸部から直線的に下方に落ちてしまうものが多い。甕A₂は丹後地方の擬凹線をもつ弥生式土器の系譜を引くもの^{注4}で、京都府裏陰遺跡、橋爪遺跡、曾我谷遺跡に見られる。擬凹線を消失した段階のものとして、庄内式に併行すると考えられている。庄内期に比定されている橋爪遺跡、曾我谷遺跡のものは平底をもつものに対して、当遺跡から出土した甕A₂はこれに対応する平底の底部は採集されておらず、甕A₂は丸底の底部をもつと考えられる。これらの遺跡から出土したものとは時期にやや差があるものと思われる。

甕 A'₁ (42~49)

甕A₁とA₂の中間的な形態であるが、甕A₁的な要素が強いものを一応A'₁とした。二重口縁をもつが、口縁下端部は突出せず、丸くおさめる。肩部が張り、やや大型の器形である。45はやや直立する口縁をもつが肩の張りは小さい。47は甕A₂的な口縁をもつが、肩がやや張るタイプである。49は

11 田多地小谷遺跡

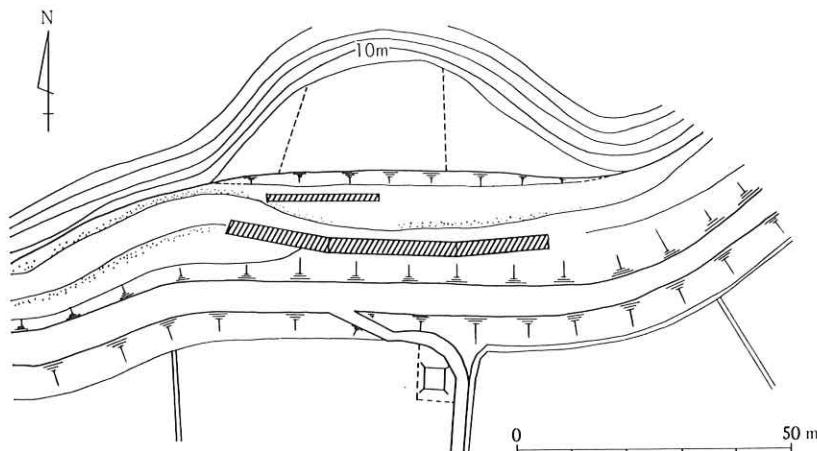


図36 トレンチ設定図

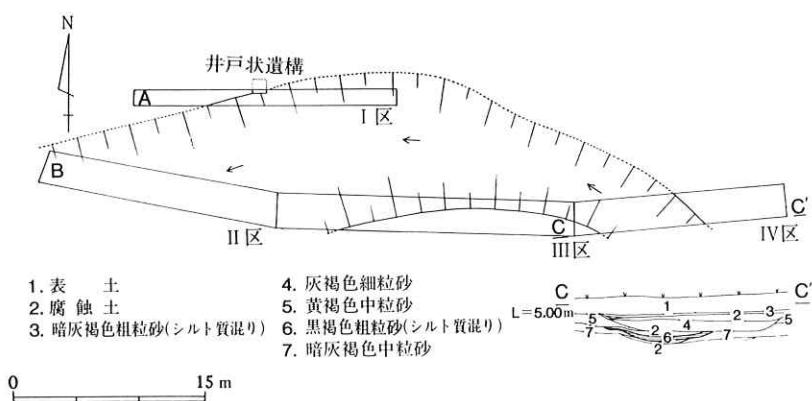


図37 遺構図

直立する幅の広い口縁をもつが、肩はほとんど張らない。

甕 A'₂ (50~55)

甕 A₁ と A₂ の中間的な形態をもつもののうち、甕 A₂ 的な要素が強いものである。小型のもので肩の張りが比較的小さい。50・54はやや斜め上方に伸びる口縁をもち、下端部をわずかに突出させている。55は口縁外面を強く横ナデして、口縁外面に凹部をつくり口縁下端部を突出させている。

その他 (57~62)

口縁内面はくの字状に屈曲するが、口縁外面に凹部をもち二重口縁風にするもの (57・58) や頸部を強くなるもの (59・61・62) がある。^{注7} 57・58は出土例にも石神社遺跡^{注7}にあり、また60は口縁部が直立し、断面が三角形になる。口縁外面に斜め方向のハケがあり、京都府久美浜町橋爪遺跡^{注8}に出土例がある。

甕 B

口縁部が内弯氣味に屈曲する一群である。口縁端部内面が肥厚し、いわゆる布留式土器に見られる特徴をもつもの (B₁)、内面が肥厚せず、口縁端面を平坦にするもの (B₂)、口縁端部を上方につまみあげるもの (B₃) がある。

甕 B₁ (63~92)

口縁端部内面が肥厚するものである。体部上半には横ハケを施し、体部下半には縱方行のハケを施す。内面にはヘラケズリを施す。肩部に刺突文を施すもの (63・64・65) がある。口縁は直線的に斜め上方に伸びるもの (76・77・79・84・91) と内弯氣味に丸味をもって伸びるもの (68・73・74・80・92など) がある。また口縁端面が平坦なもの (66~79) と肥厚部が内側に長く傾斜するもの (80~92) がある。前者の方は全体に薄手で整形が丁寧である。後者の方は厚手でつくりはやや雑である。

甕 B₂ (93~98)

内弯氣味の口縁をもつ。口縁端面は平坦で、外側に傾斜する。口縁端部内面は肥厚しない。体部内面はヘラケズリである。

甕 B₃ (99~103)

口縁端部を上方につまみあげる。口縁は頸部から大きく屈曲し、受け口状になる。外面は縦ハケを施し、体部内面はヘラケズリを施す。101には刺突文が施されている。

甕C

口縁部がくの字形に屈曲する甕である。甕Bのように口縁が内彎するのではなく、外反するものである。

甕 C₁ (107~115)

口縁端面が平坦で外傾する。体部外面は縦方向のハケを施している。内面はヘラケズリを施すが、107についてはハケを施している。

甕 C₂ (116~131)

口縁の外反の程度が C₁ よりも強く、口縁端部を丸くおさめる。116から124の甕は口縁の外反の度合いが一層強く、口縁端部を下方に折り返す。このため口縁内面が上方に向く。体部内面はヘラケズリを施す。119については内面にハケを施している。125から131の甕については口縁端部は丸くおさめるが、口縁の外反度は前者ほど極端ではない。^{注9} 125は肩の張りがほとんどなく、頸部から胴部上半にかけて直線的にのびる。島根県タテチョウ遺跡に類似例がある。127は算盤形になる器形で、内面はハケ調整。129から131については肩部から胴部にかけて丸味をもつ。

その他 (132~136)

頸部が長く、短い口縁部をもつ132・133などがある。

甕D

甕 D₁ (137~143)

やや斜めに立ち上がる口縁をもつ。体部は橢円形に近い。いずれも胎土は粗く、器壁は厚い。体部外面に粗いハケを施す。整形はきわめて雑で、内面に粘土紐の継ぎ目がそのまま残されているものがある。内面のヘラケズリは下から上の方向に削りあげられている。

甕 D₂ (144~147・150)

やや斜めに立ち上がる口縁をもつが、D₁ に比べて口径が広くやや大型の器形になる。いずれも外面に煤が付着する。その他、口縁が長く、外反するもの (144) や口縁が短く胴が大きく張るもの (148)、直口で体部が丸味をもつもの (149) などがある。

壺A

壺 A₁ (151~162)

二重口縁をもつ。口縁は外反し、口縁端部を平坦にするものが多い。口縁

下端部は鋭く突出し稜をもつ。頸部は下方に長くのびる。151・155のように肩部に櫛描直線文をもつものがある。口縁内外面とも横ナデを施す。体部内面はヘラケズリ。頸部に縦ハケが残るもの(151・153・161)がある。153は内面にハケ痕が残る。

壺 A₂ (163~166)

二重口縁をもつが、口縁下端部が下垂する。口縁は A₁ よりも外反度が強い。163の口縁外面には竹管文が1つ施されている。164は整形が粗く、口縁内面にも粗いハケが残り、口縁下端部は断面三角形の突帯を貼り付けたものである。166は口縁部を欠くが、頸部外面は縦ハケ、胴部は横方向のハケを施す。内面のヘラケズリの位置はきわめて低い。

壺 A₃ (167~170)

幅の広い二重口縁をもつ。167・168の口縁部は大きく外反する。169は口縁端部内面が肥厚する。170については口縁端面が平坦で外側に傾いている。

壺 B (171~174・176)

口縁の幅は短く、直立または外反する。171は短く外反する二重口縁をもつ。これに対して172は同様の二重口縁をもつが、171に比べて口縁はあまり外反せず、体部外面は目の粗いハケを施す。174は短くほぼ直立する口縁をもつ。176は口縁下端部が外方に突出し、上端が内傾する大型の壺である。肩が張るが、胴の張りは少ない。外面に細かいハケを施し、体部内面は肩部については横方向、胴部については下からの削りを行う。

壺 C (180~185)

口縁が内傾し、口縁下端部が斜め下方に鋭く突出する。口縁部や頸部外面に刺突文や竹管文を施すのが特徴的である。兵庫県朝来郡朝来町ミゾ谷古墳出土と伝えられている壺棺、鳥取県秋里遺跡などに類例がある。^{注10} 185は竹管文と組み合わせた S字状のスタンプをもつ。S字状のスタンプ文は、島根県松本1号墳出土の壺や京都府谷垣遺跡出土の特殊円筒形埴輪に類例がある。^{注11}^{注12}

壺 D (186~188)

直口系統の壺である。口縁はやや斜め上方に立ち上がり、188は二重口縁を意識しており、口縁と頸部の間に断面三角形の突帯を貼り付けている。186と187は同一個体になるものと思われる。187は底部をわずかに平底にする。器壁は非常に薄い。島根県秋里遺跡や鳥取県長瀬高浜遺跡に同様の壺が

出土している。

壺その他 (175・177~179・189~193)

口縁がわずかに内面に拡張し、胴の張りが極めて小さいもの (175)、長い頸部をもち、口縁が内傾するもの (177)、直口系統のもの (190・191) がある。

高杯

杯部はその形態によって次の三つに分類した。すなわち、下半部に稜をもつもの(A)、下半部に稜をもたず、底部からゆるやかに屈曲しながら、上部で大きく開くもの(B)、また、これらに比べて小型のもので、器壁は厚く外面に粗いハケを残すもの(C)がある。数量的にはA形態、B形態に対して、C形態のものが圧倒的に多い。また、脚部については分類せず、一括して説明を加えた。

高杯A (197・200~203)

体部下半に稜をもつもので比較的大型の高杯である。200の脚部は太く短い柱状部をもち、裾部は柱上部から屈曲して広がる。201は下半分を作った後、上半部を乗せている。上半部と下半部の接合部には断面三角形の突帶を貼り付けている。203は口縁部が大きく外反するもので秋里遺跡に類例がある。

高杯B (204~207)

底部からゆるく彎曲しながら上方で外に大きく開く杯部をもつ、器壁は薄く、胎土は精良であり、内外面のヘラミガキが顕著である。脚部は柱状部からゆるやかに開く。204の脚は外面に細かいハケ痕が残る。

高杯C (194~196・198・199・208~218)

浅い杯部をもち器壁は全体に薄手に仕上げるもの (209・210) と器壁は厚く、やや深めの杯部をもつものがある。後者は胎土は粗く、外面に粗いハケの痕を残すものが多い。底部から屈曲して外反するもの (208・216~218) とほとんど屈曲しないもの (212・214・215) がある。199は中実の脚部をもち、杯部が椀状に丸味をもつ。

その他 (219・278・279)

ガラスコップ状の杯部をもつもの (219) がある。また278・279は底部から丸く内彎気味に立ち上がり、口縁部で外反する。京都府裏陰遺跡に類例がある。

高杯（脚部）（220～234）

柱状部から屈曲して裾部に続くもの（220～222・230）や柱状部から大きく屈曲して裾部に続き、裾部から水平に近くなるもの（224・226～228）がある。このほか、裾部にかけてほとんど屈曲せずゆるやかに八の字状に広がるもの（225・231・233）がある。225はやや厚手のもので、裾部は大きく開く。234は上部に椀状の杯をもつ脚部である。透かしは全くないものや1つだけのもの、2つもつもの、また3つもつものがある。

器台

器台には丹後地方の弥生時代からの系譜を引く器台A₁・A₂と山陰地方のいわゆる鼓形器台と呼ばれている器台Bがある。

器台A₁（237～240）

くの字形に開くもので、複合する口縁をもつ、口縁部を擬凹線に貼り付けて、口縁下端部を下垂させるもの（237・239）口縁部に断面三角形の突帯を貼り付け、下半部を下垂させるもの（238・240）がある。237は口縁部外面に細い擬凹線を施している。脚部柱状部内面はしづらり、裾部はハケを施している。脚部外面と口縁部内面はヘラミガキを施している。四方透かしである。238～240は内外面ともヘラミガキを施している。

器台A₂（235、236）

くの字形に大きく開くもので、口縁部は受部から屈曲するが、A₁のように下垂しない。235はやや小型のもので脚部内面にはハケ目が明瞭に残る。236は内外面ともヘラミガキを施している。

器台A・脚部（241～243）

外面はヘラミガキを施すが、裾部内面にはハケを施す。243は裾部外面にハケを施している。透かしには四方透かし、三方透かし、二方透かしがある。

器台B（244～248）

上台は脚台より径が大きく、口縁部は外反する。上台内面はヘラミガキを施す。脚台内面はヘラケズリを施し、裾部については横ナデしている。244・245は上台と脚台の接合部の間隔が広い。248は器高が低く偏平な感じを受ける。

小型精製土器

小型丸底壺（249～257）

11 田多地小谷遺跡

胴部の最大径が口径に対して等しいか、それを上まわる。頸部がくの字形に大きく屈曲し、口縁が斜め上方にのびるもの（249～252・257）と頸部はあまり屈曲せず、口縁が直上、若しくはわずかに斜めに立ち上がるもの（253～256）がある。体部外面はハケ調整を施し、内面をヘラケズリするものが多い。252は体部が算盤形になるもので、体部下半部にハケ調整とヘラケズリを行う。256は京都府裏陰遺跡に類例がある。

小型器台（258～260）

くの字形に大きく開くもの（258・259）と、口縁が短く直立するもの（260）がある。前者はそれぞれ器台A₁とA₂を小型化したものである。

小型高杯（261～265）

261の杯部は底部からゆるやかに上方に伸びるもので、口縁はやや外反気味になる。形態としては高杯Cを小型化したものである。262・263は体部下反に稜をもつもので、口縁は大きく外反する。高杯Aを小型化したものであり、262は高杯203、263は高杯202に共通する形態である。この他ミニチュアのグラス状高杯（264）がある。265は宮内遺跡に類例がある。

低脚杯（266～275）

器高に対して口径が小さく、体部が底部から大きく屈曲してやや直上に伸びて椀状になるもの（266・267）と底部からほとんど屈曲せず斜め上方に大きく開き皿状になるもの（268～275）がある。脚部については外方に大きく広がるものと短くふんばるものがある。

鉢形土器

鉢A（276・277）

斜め上方に大きく広がる口縁をもつ、口縁は体部から屈曲して続く、内外面に磨きを施す。276は口縁外面に擬凹線をもつ。

鉢B（280～290）

小型の鉢である。底部は丸底ないしは小さい平底をもつ。体部内外面ともハケを施すもの（280・283）と外面をハケメ調整、内面にヘラケズリを施すものがある。また、280～282のように口径が広く、体部が斜め上方に大きく広がるものと、283・286のように口径が小さく、体部が直上方向に伸びるものがある。

台付鉢脚部（293～304）

外方にふんばる短い脚である。体部は脚からゆるやかに立ち上がっていくもの(298・301)、脚から急角度で上方に立ち上がっていくもの(299・300・302)がある。303は大型のもので短くふんばる脚をもち、内面はヘラミガキを行っている。脚部外面にヘラミガキを行うもの(288・293)とハケ目を残すものの(289・294・300)がある。脚部のつくり方は、(中略)弥生式土器の高杯の製作法にみられるように、脚部と体部を連続的につくり出し、内面の穴を粘土円板で充填するもの(296・300~302)がある。296は上方と下方の両サイドから粘土円板を充填している。

甑形土器 (291・292・317)

291は小さな平底、292は丸底である。いずれも穿孔は一つである。291は穿孔に二度失敗し、最後に横から穿孔している。穿孔は291については焼成後、292については焼成前に行っている。317はいわゆる山陰型の甑形土器である。外面にハケ調整を行い、口縁部内面は横ナデ、体部上半については横方向のヘラケズリ、下半については下からの削りを行っている。

小型粗製土器 (305~309)

305、306は小型の鉢型土器である。306には口縁外面と内面底部に指押さえの痕がある。305は平底風であり、306は丸底である。307~309はいわゆる手づくりね土器である。307は小型の甕形土器を模したもので、くの字形に屈曲する口縁をもち、底部は平底である。308は同じく口縁は頸部からくの字形に屈曲するが底部は平底である。309は小さな鉢を模したもので、内外面には指押さえ痕が明瞭に残る。

蓋形土器 (310~316)

つまみ上端部を斜め上方につまみ上げ、中央部を凹状にするものが多い。体部はつまみの下部からややそり返るようにして口縁部に続く。内外面ともハケ調整を行うものが多いが、311と316の外面にはヘラミガキを行っている。315は直立するつまみと笠形に彎曲する体部をもつ。

2. 弥生式土器 (図54、写真25~27上)

318から322までは口縁部に擬凹線を施すもので、弥生後期から庄内併行期に比定されるものである。内面の整形については318・322はハケ、319・321はヘラミガキ、320はヘラケズリを施す。胎土はいずれも精良である。体部の張りはほとんどない。322の口縁は直立する。この他、弥生時代中・後期

の土器323～330が出土しているが、点数はごくわずかである。

(3) 須恵器 (図55、写真28)

古墳時代の須恵器

杯A (331～334) は立ち上がりが低く内傾する。蓋には口縁内面にかえりのつくもの (336) がある。杯B (337～339) は小型のもので、蓋と杯身が逆転したものである。表採資料のため、時期的にばらつきがあると思われるが、^{注13} 全体的には杯と蓋が逆転した陶邑の TK217 の頃に比定されるものが多い。

奈良・平安時代前期の須恵器

蓋Cにはやや小型のもの (343・345) と大型のもの (344・346) があり、つまみには偏平なものと宝珠形のものがある。天井部はヘラケズリを施し、口縁端部は鋭く屈曲する。347・348は口径の広い皿であり、底部の切り離しはヘラ切りである。348の口縁はわずかに外反する。杯C (349～352) は平底の杯で、底部の切り離しはヘラ切りである。底部と体部の境が明瞭なもの (351・352) と底部と体部の屈曲部が丸く、境がやや不明瞭なもの (349・350) がある。杯Dは付高台をもつ一群である。体部が付高台より、やや横に張って斜め上方に立ち上がるもの (353～355) と体部が付高台より直ちに斜め上方に立ち上がるもの (356) がある。後者については底径が小さく、椀形に変わる前の段階の杯である。357～360は大型の杯、361は大型の皿である。個々の遺物についてはやや時代幅があると思われ、蓋類のように古い形態をもつものもある一方、356のように新しい形態をもつものもある。時代的には8世紀中葉から9世紀前半のものであろう。

平安時代中・後期の須恵器

碗A (362～364) は糸切りの平底に高台を貼り付けたものである。363は高い高台をもち、底部内面に沈線を円形 (直径4mm) に巡らしている。宮内遺跡にも出土例がある。364は糸切り平高台をもち、高台側面はヘラで整えている。

(4) 石器 (図56、写真27下)

砥石

いずれも砂岩系統の石である。1は大型のもので上面、下面、両側面とも使用している。特に上面、下面がよく使用され、硯石のような形になっている。2は上面、下面ともよく使用している。上面には細い擦痕が何本かある。

3は上面、下面ともよく使用され偏平になっている。

3. 遺物の検討

遺物は山陰系、丹波系、畿内系の三つの系統が混在している。時期的には畿内の口縁端部内面が肥厚した甕に代表される布留式併行期に求められるが、なお、山陰、丹後地方の土器編年の問題もあるので、遺物の時期について検討を加えてみる。

出土遺物の器種構成についてみると、秋里遺跡や青木遺跡など山陰地方の土器と共通するものが多い。代表的なものとして甕 A₁、壺、高杯、器台B、甑形土器(317)などがある。器台Bの244・245や壺178などに古い形態のものが見られるが、全体としては布留式併行期に比定されている青木遺跡VII期の時期に求められる。

一方、甕 A₂は丹後地方に見られる甕である。口縁部に擬凹線をもった弥生式土器の系譜をもつものであり、口縁部の擬凹線を消失し、ナデ調整を施したものである。このタイプの甕の時期については従来より、畿内第五様式後半に求める見解や庄内式、あるいは布留式に求める見解などがあり、きわめて流動的であった。最近の京都府園部町曾我谷遺跡では、庄内式に比定されており、甕 A₂のタイプの時期については一応、庄内併行期のものとする見方が一般的である。

しかしながら、当遺跡では先述のとおり、甕 A₂は畿内の布留式の土器と共に併存しており、上記の遺跡の調査結果とは異なっている。もちろん出土遺物は旧流路からの出土であり、時期の異なるものが混在している可能性がある。この点については、確かに、古い時期に属するものとして、この甕 A₂のほかに蓋形土器、前述の器台Bの244・245や壺178などがある。しかし、これらの出土点数はごくわずかであり、これとセットになる壺・高杯などは明らかに布留式に併行するものである。甕 A₂だけが庄内の時期に属していたとは考え難く、甕 A₂の底部は丸底と考えられるのである。^{たた}、叩きをもち、平底の底部をもった曾我谷遺跡などの甕とは明らかに時期を異にしているものと思われる。擬凹線を消失した甕 A₂は、弥生時代後期、もしくは庄内という一時期に限定されるのではなく、恐らくその存続期間に幅があるのであって、その形態については布留式併行期までは確実に残るものと考えて差しつかえなかろう。

また、このほか丹後系統のものとして器台Aがある。器台Aは出石町大谷^{注14}西の谷遺跡や日高町祢布ヶ森東遺跡の器台に続く系統のものである。この器台Aと九重式に祖型をもち、明らかに系譜の違う器台Bが混在していることは注目に値する。

一方、畿内系統の土器には甕B₁や小型丸底壺がある。甕B₁には口縁端面が平坦で、内側に丸く小さく肥厚するものと肥厚部が内側に長く傾斜するものがある。後者の方が新しい要素と考えられているが、いずれも流路内より混在して出土しており、時期差については、今回の調査では明確にし難い。^{注15}

小型丸底壺については253のように船橋遺跡のK-1出土のものと類似するものもあるが、全体に口径に対して体部の径が上まわっており、同じ船橋遺跡のO-1の小型丸底壺を見る限りは、布留式のうちでも、それほど古い段階に置くことはやや難しい。

但馬地方の古式土師器については石野氏の研究があるが、それ以後については出土資料も少なく、実際に集落址等の発掘例が極めて少ないことから、ほとんど進展を見せていない。今回の田多地小谷遺跡のように多量の遺物が出土したのは但馬地方で初めてであり、資料的な価値を充分にもつものと思われるが、旧流路からの出土という問題もあり、いずれにしても今後の資料の増加に期待せざるを得ないであろう。

注 1. 「鳥取・秋里遺跡1」鳥取市教育委員会 1976年

注 2. 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書I～II」鳥取県教育文化財団 1981・82年

注 3. 「青木遺跡発掘調査報告書I～III」鳥取県教育委員会 1976～78年

注 4. 「裏陰遺跡発掘調査概報」京都府大宮町教育委員会 1979年

注 5. 「橋爪遺跡発掘調査概報」埋蔵文化財発掘調査概報 京都府教育委員会 1981年

黒田恭正・杉本宏「京都府久美浜町橋爪遺跡出土の土器について」『古代文化』第33巻第3号 1981年

注 6. 「曾我谷遺跡発掘調査概報」園部町教育委員会 1977年

注 7. 「出石・宮内遺跡」出石町教育委員会 1984年

注 8. 注5

注 9. 「タテチョウ遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育委員会 1979年

注10. 「立脇トウスガ谷古墳群第二号墳の調査」朝来町教育委員会 1979年

注11. 「松本古墳調査報告」島根県教育委員会 1963年

- 注12. 「谷垣遺跡」『中上司遺跡発掘調査報告書』加関町教育委員会 昭和54年
 注13. 田辺昭三「陶邑古窯跡 I」平安学園考古学クラブ 昭和41年
 注14. 渡辺昇「出石郡出石町西の谷遺跡出土器台」『兵庫考古』7号 1979年
 注15. 「祢布ヶ森東遺跡」日高町史資料編 1980年
 注16. 田辺昭三「船橋遺跡の土器の研究」1969年
 注17. 石野博信「但馬の古式土師器」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 1974年

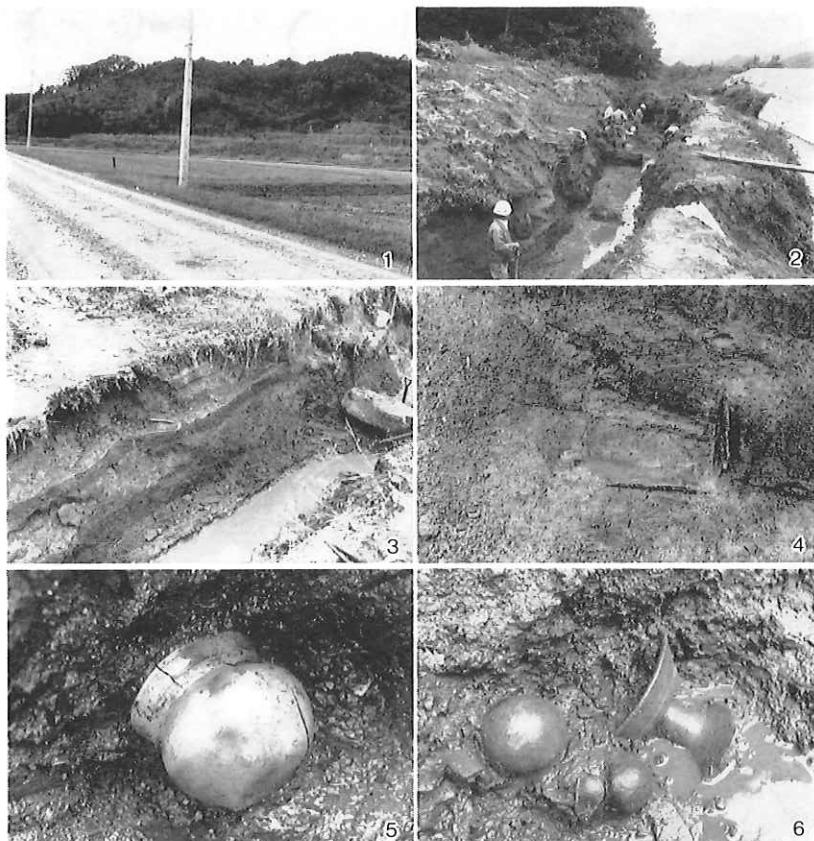


写真21 調査と遺物

- | | | |
|-----------|----------|------------|
| 1. 遺跡遠望写真 | 2. 調査風景 | 3. 土層写真 |
| 4. 井戸検出写真 | 5. 壺出土写真 | 6. 高杯他出土写真 |

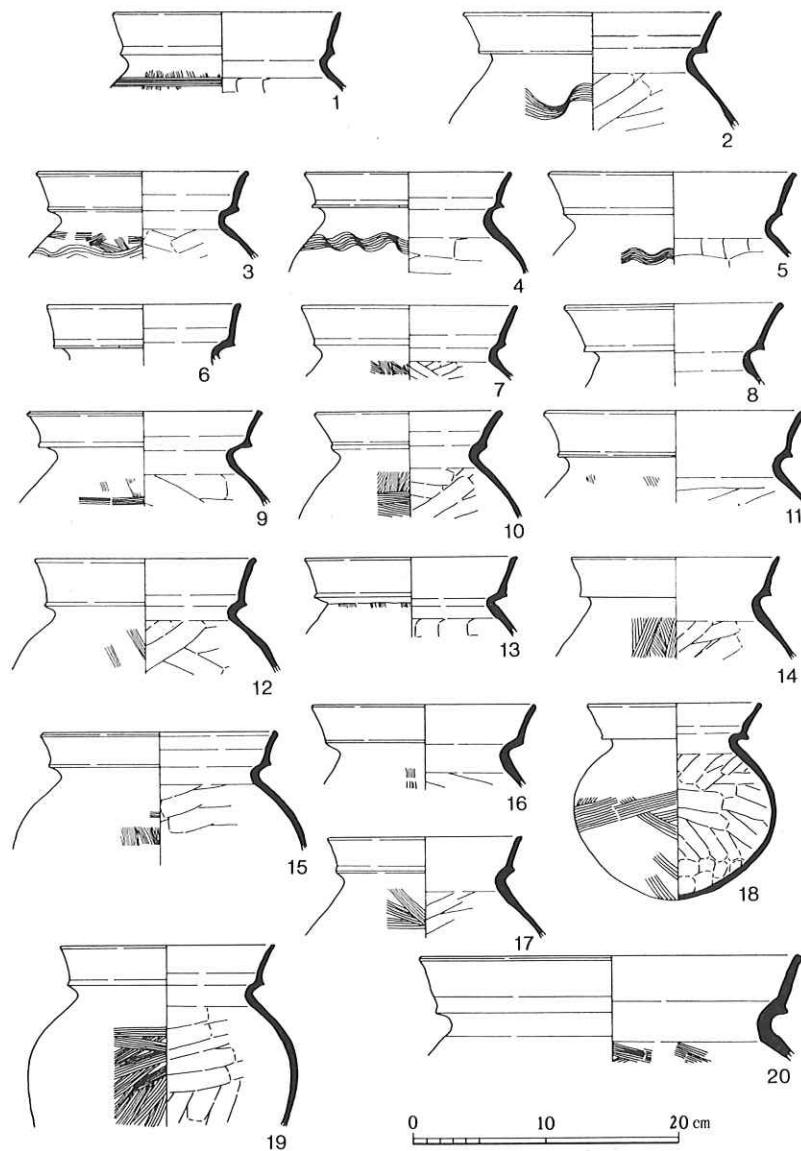


図38 土師器

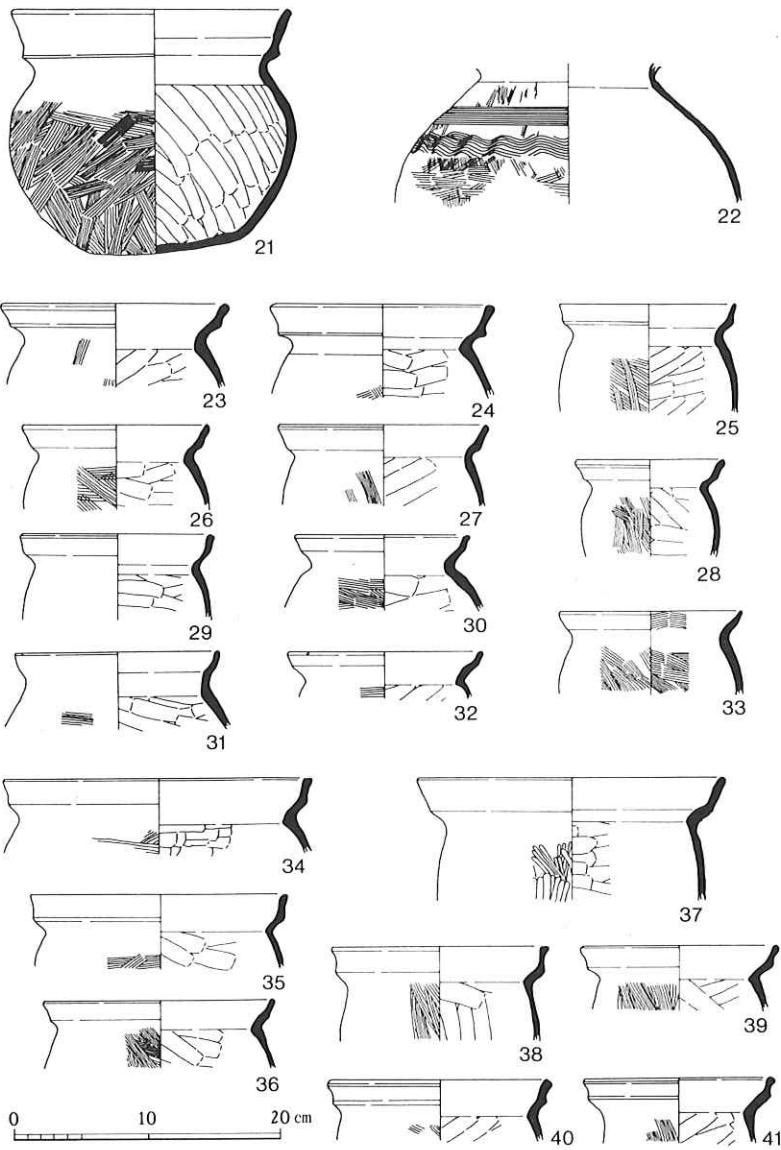


図39 土師器

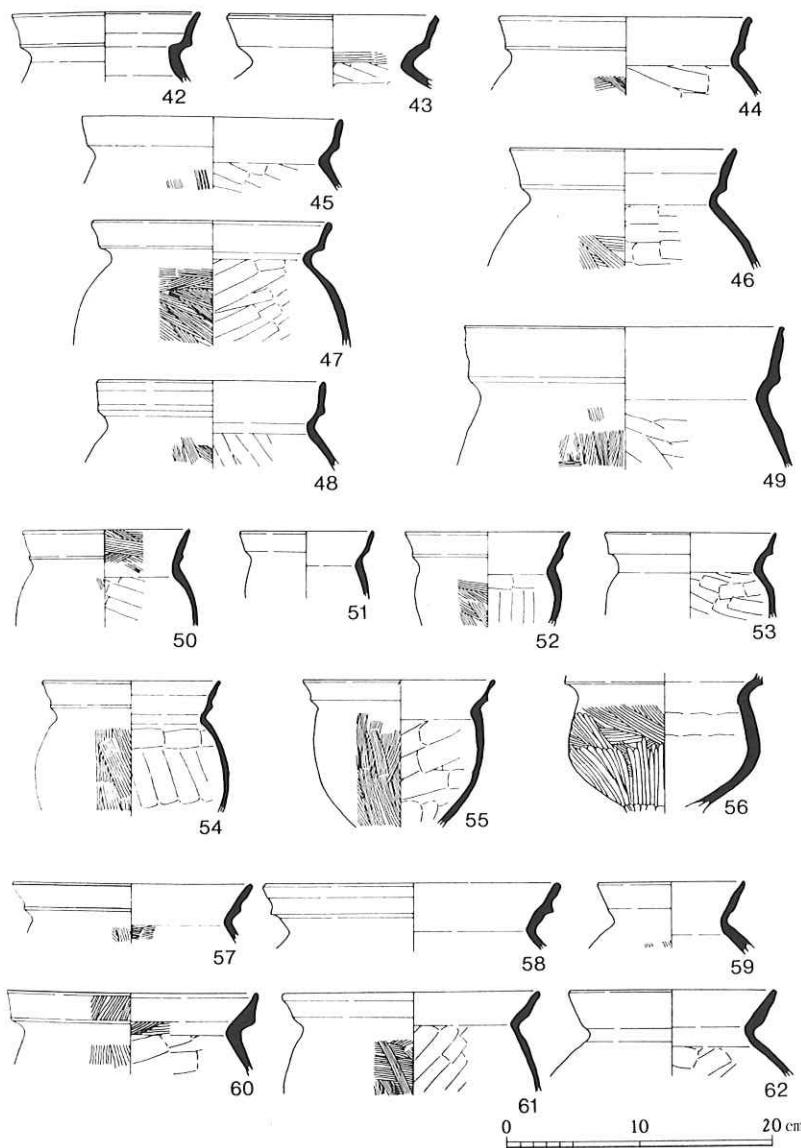


図40 土師器

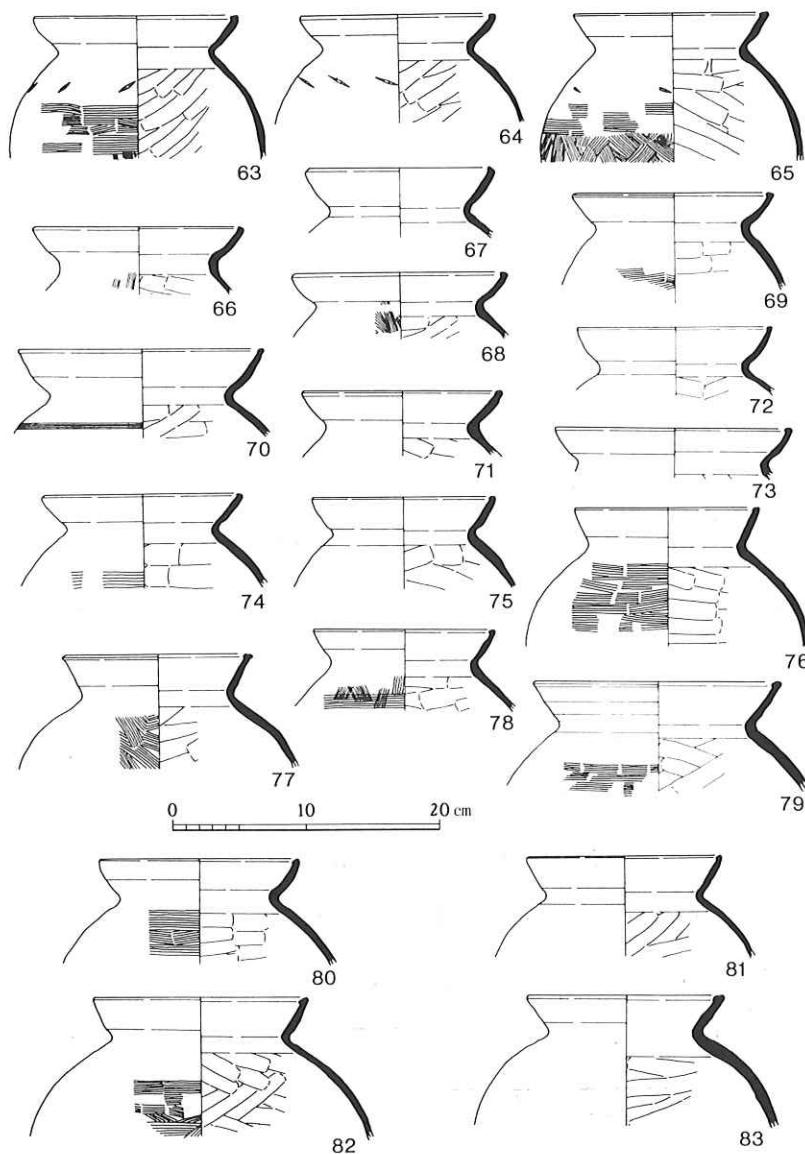


図41 土師器

11 田多地小谷遺跡

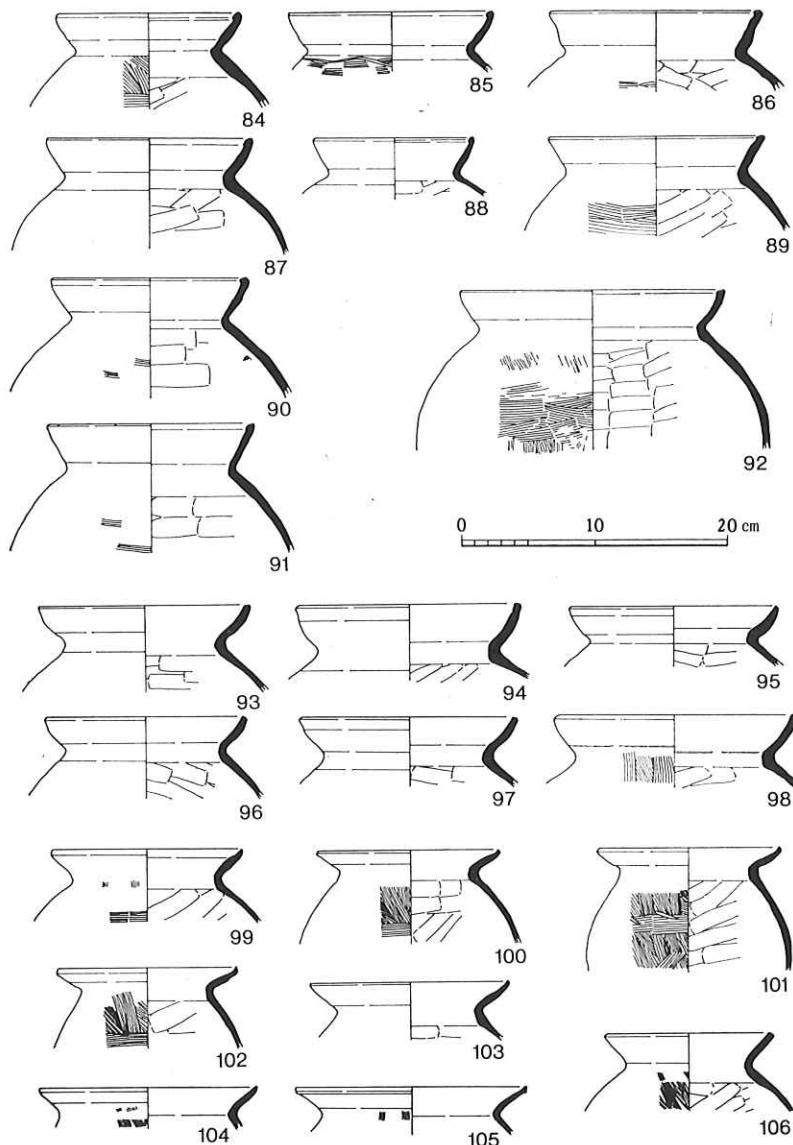


図42 土師器

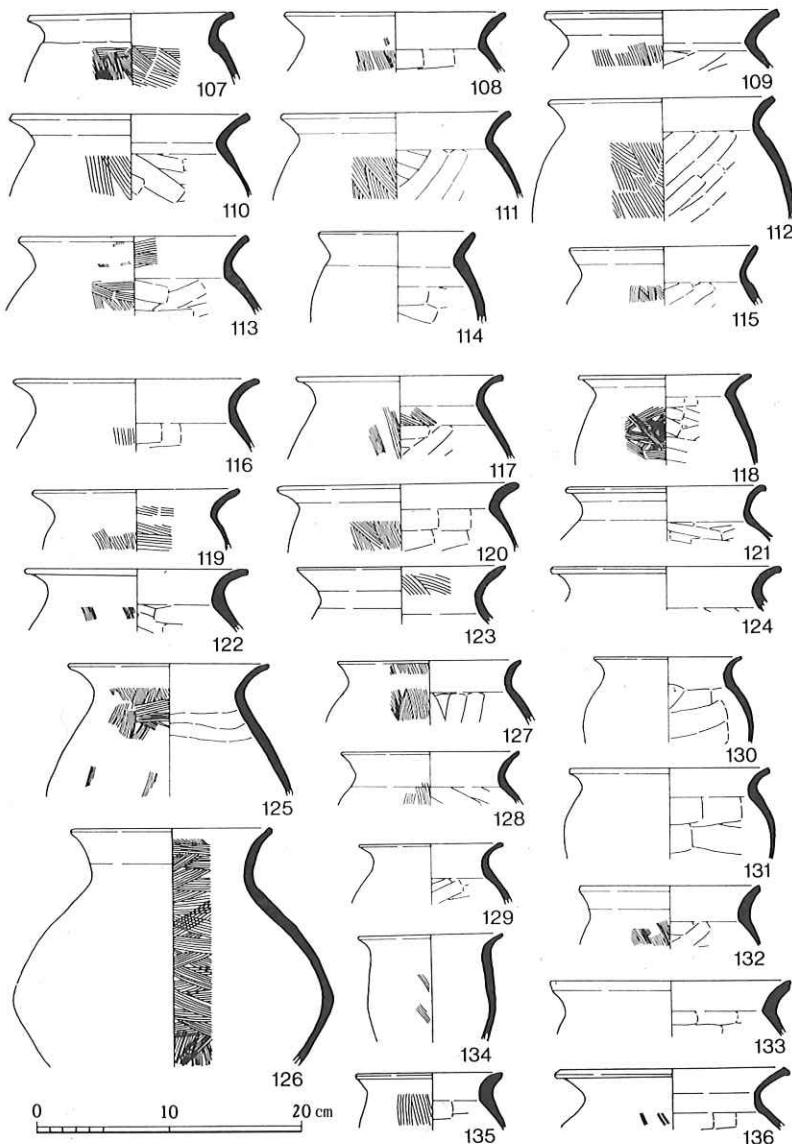


図43 土師器

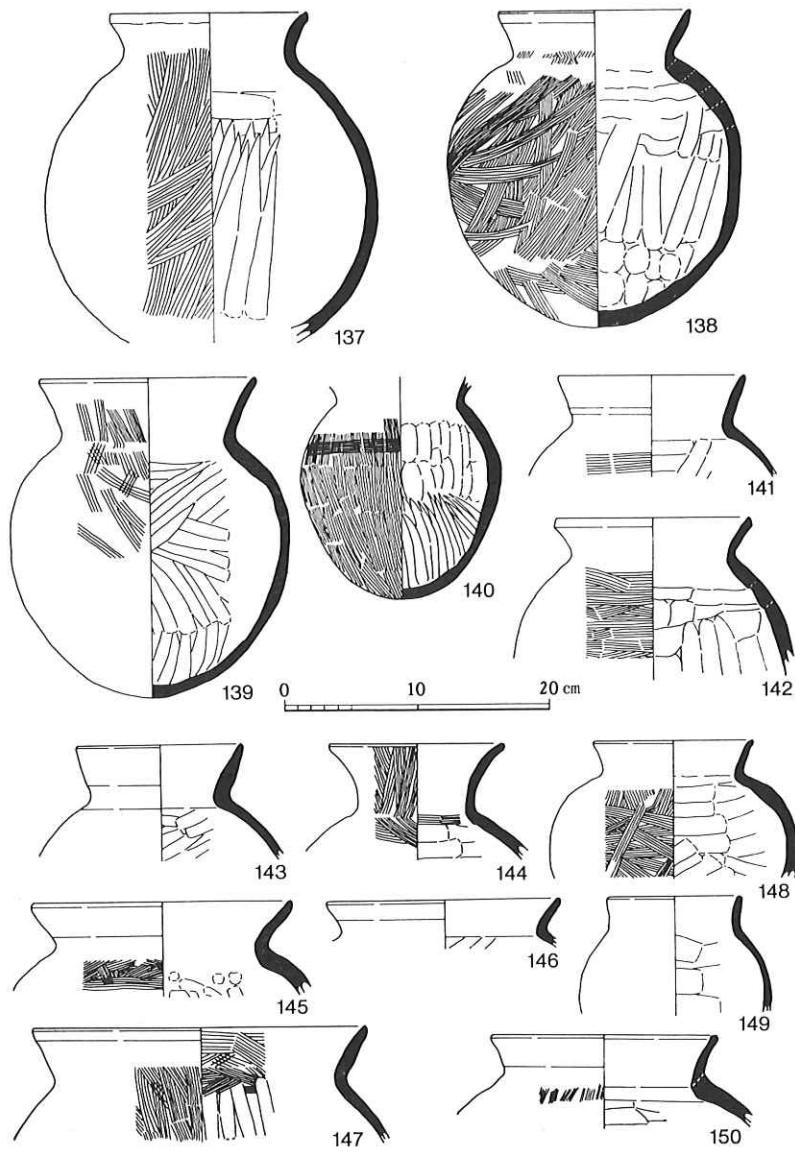


図44 土師器

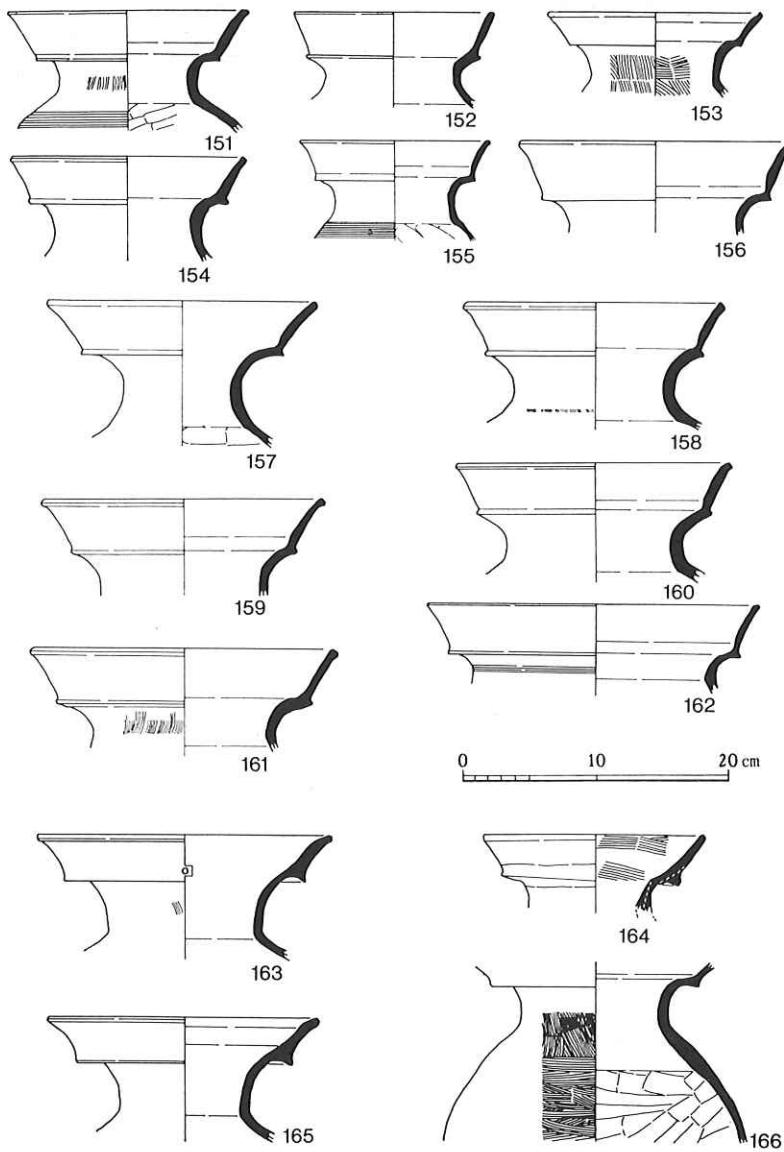


図45 土師器

11 田多地小谷遺跡

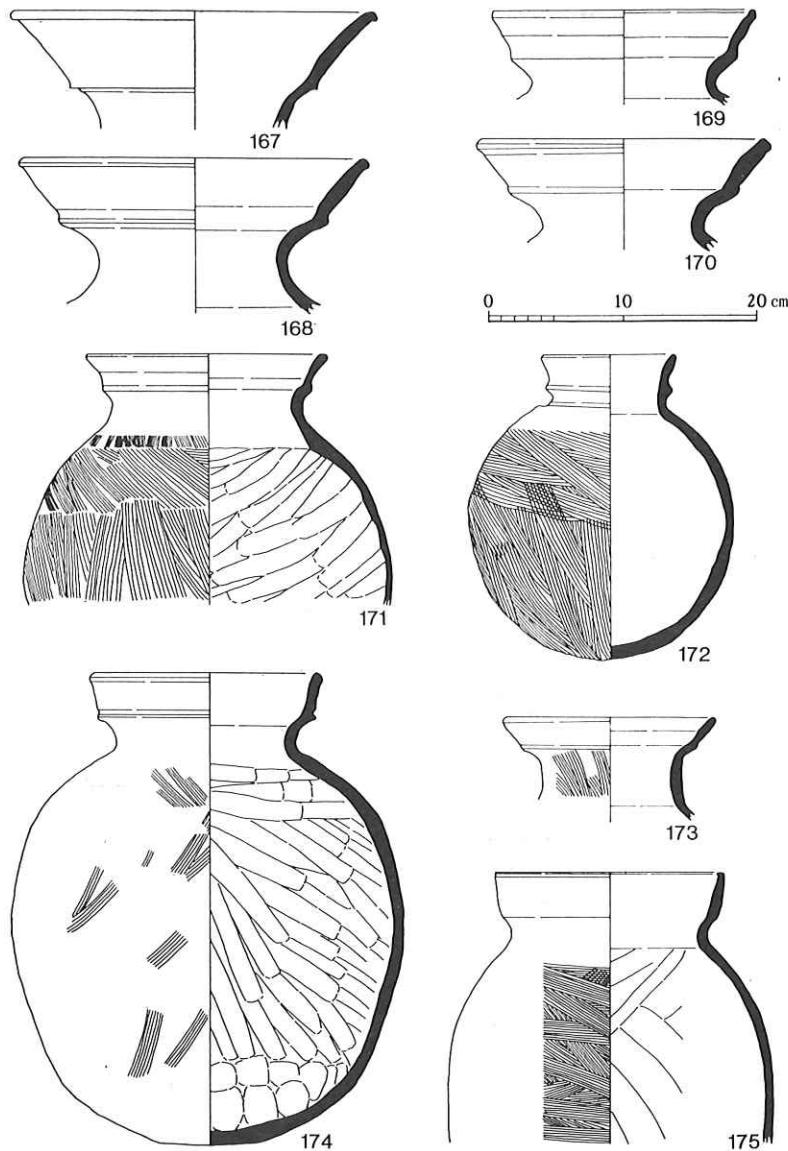


図46 土師器

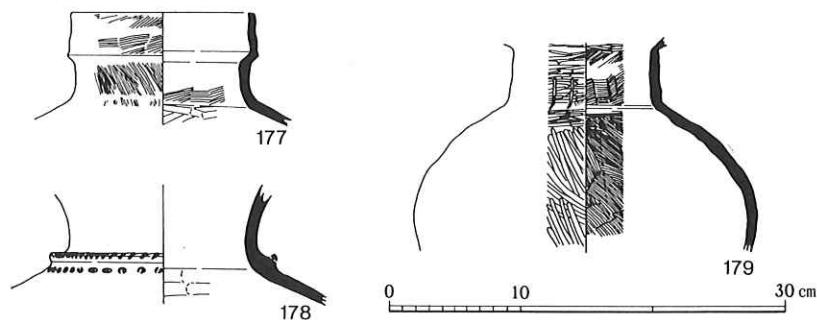
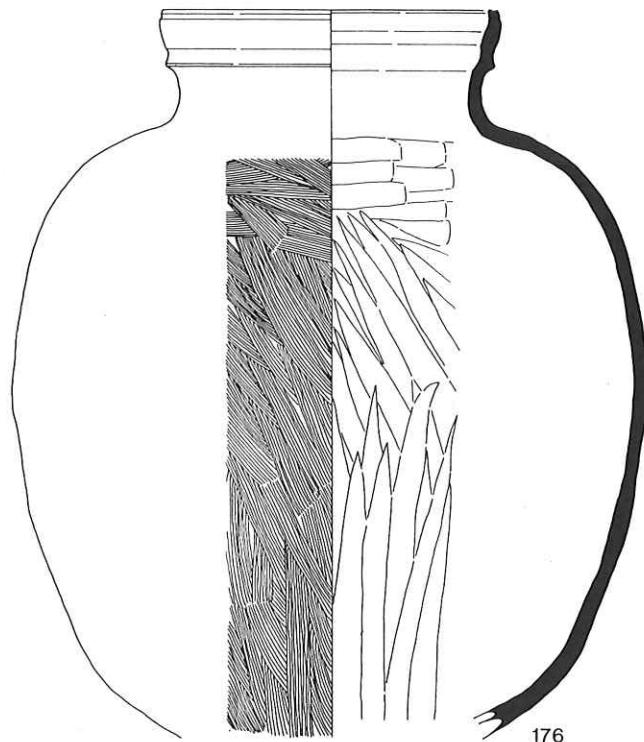


図47 土師器

11 田多地小谷遺跡

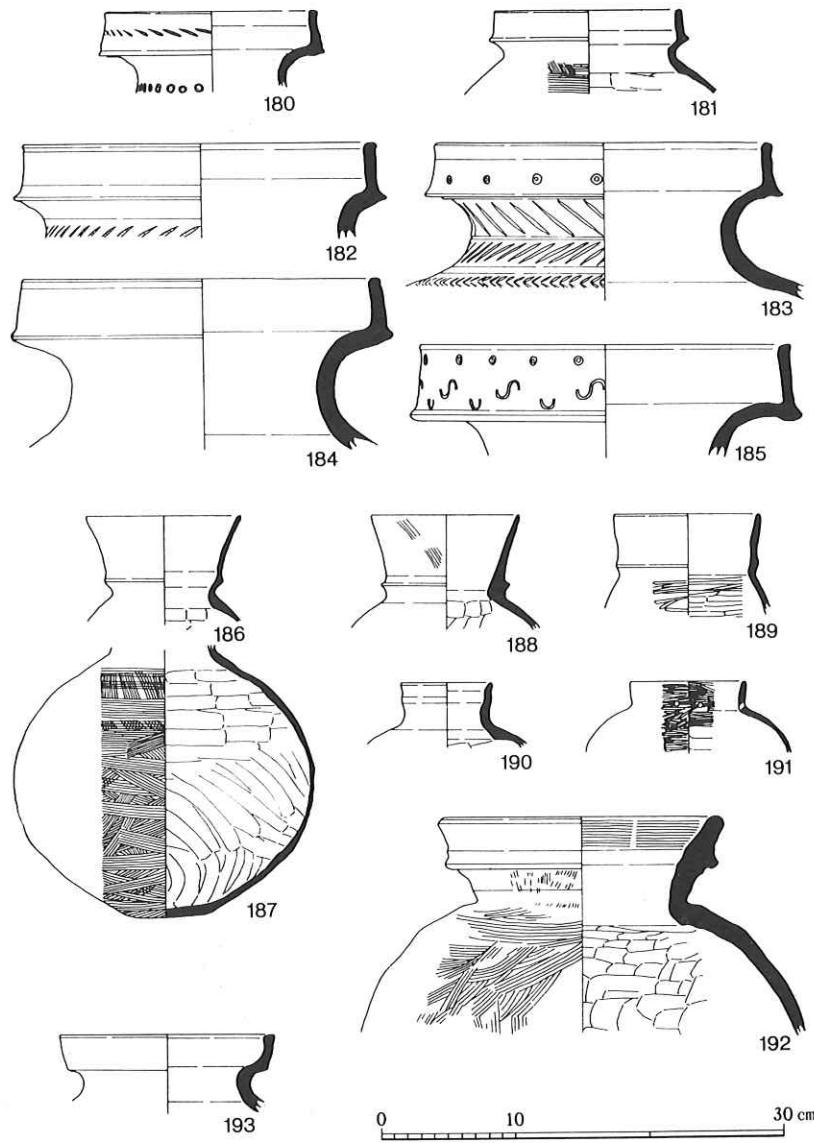


図48 土師器

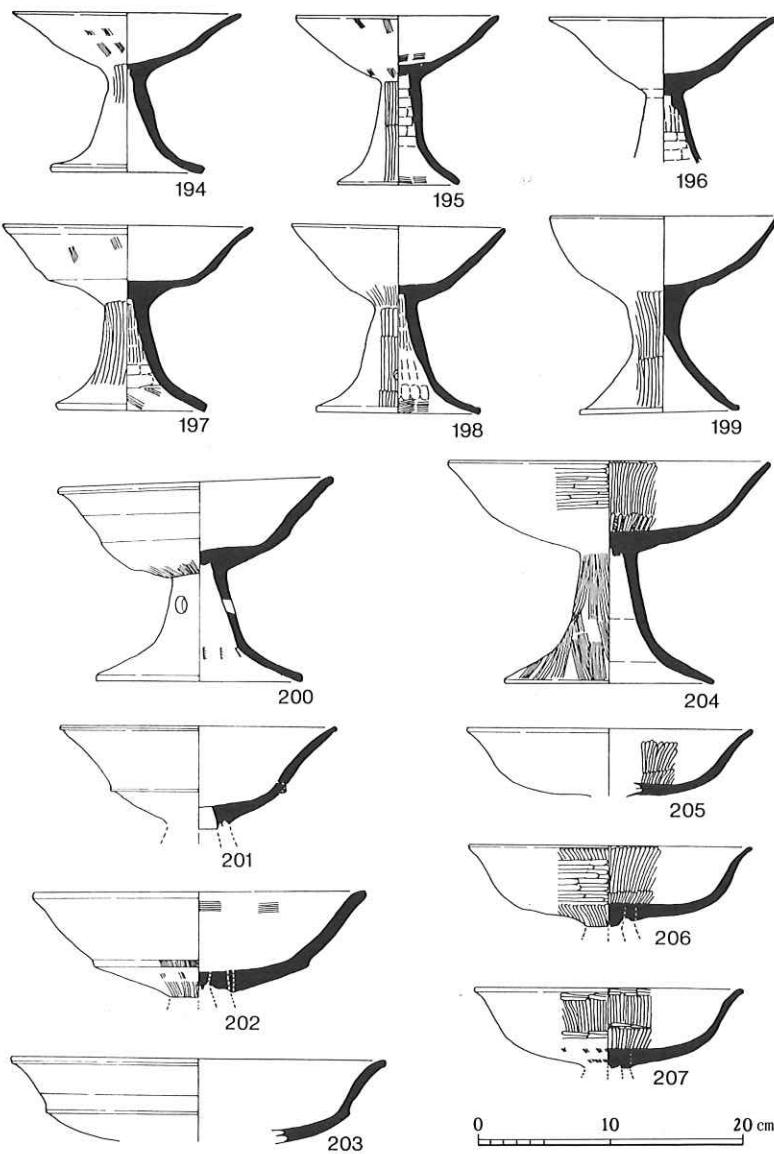


図49 土師器

11 田多地小谷遺跡

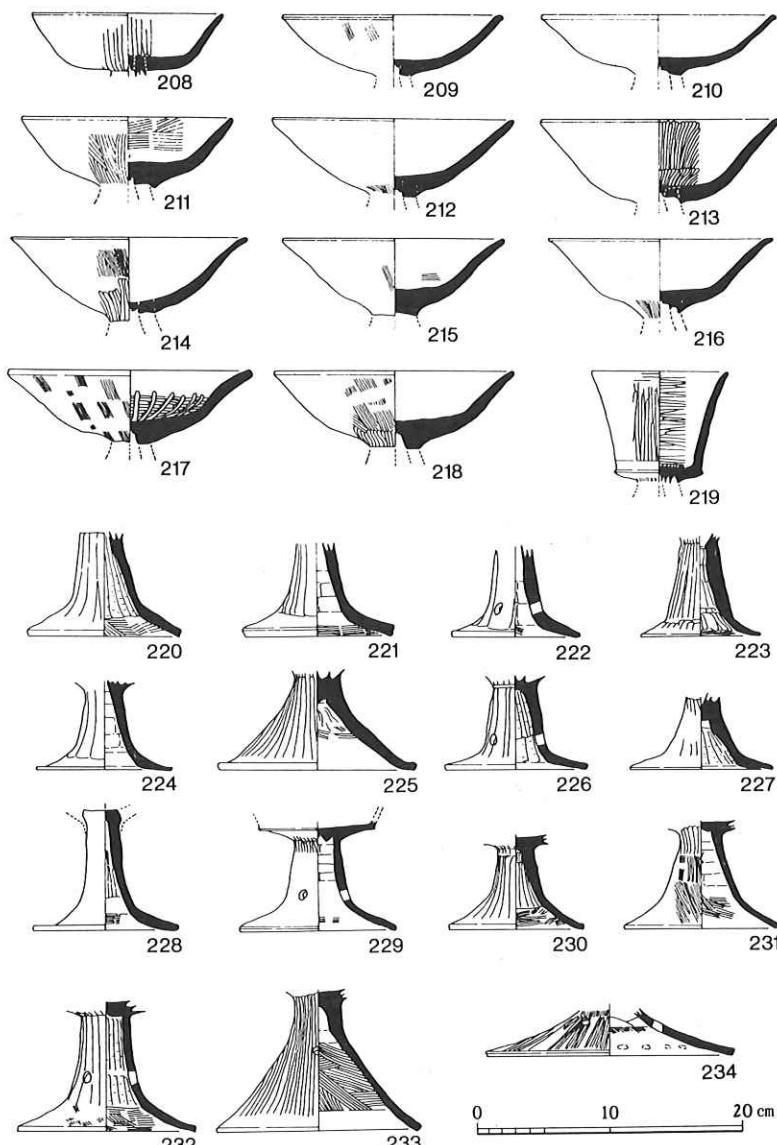


図50 土師器

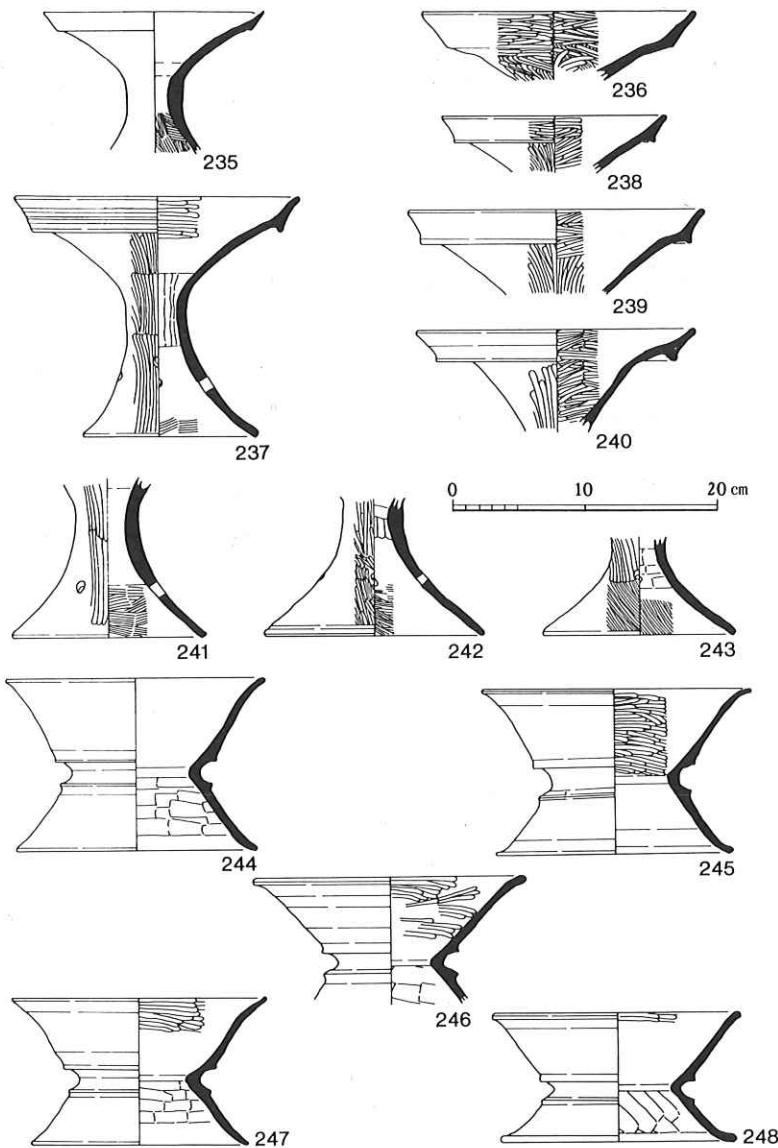


図51 土師器

11 田多地小谷遺跡

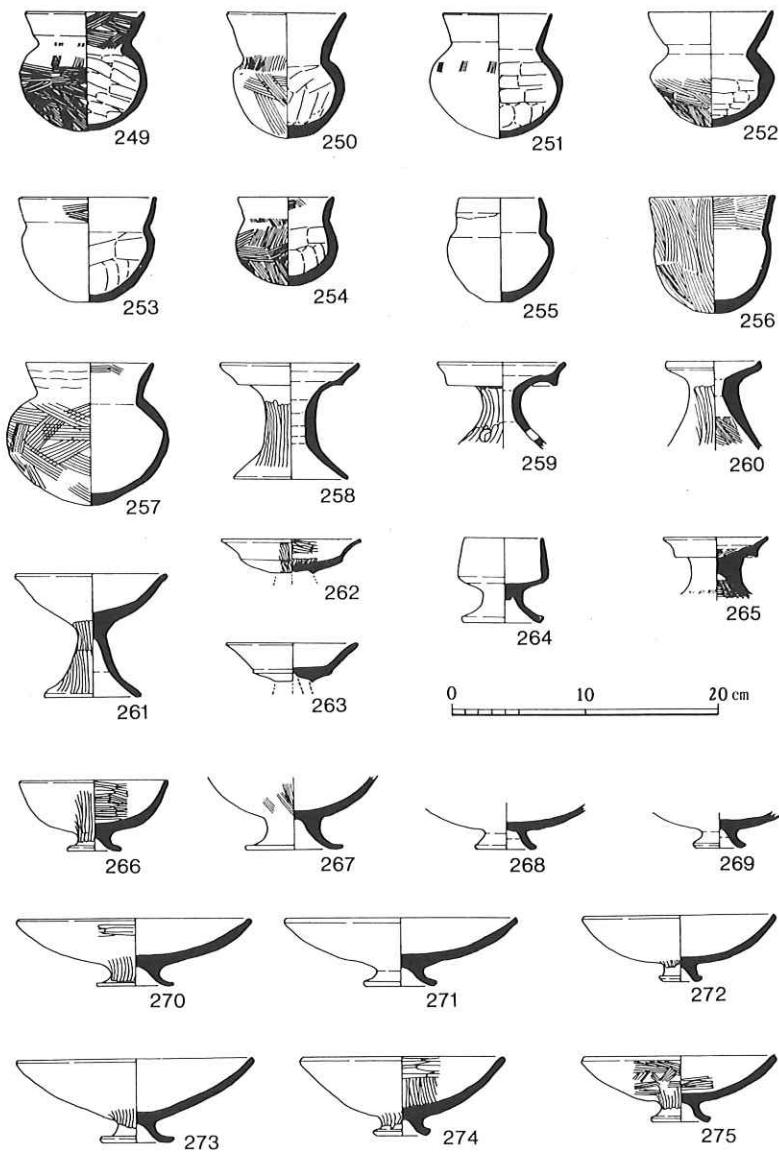


図52 土師器

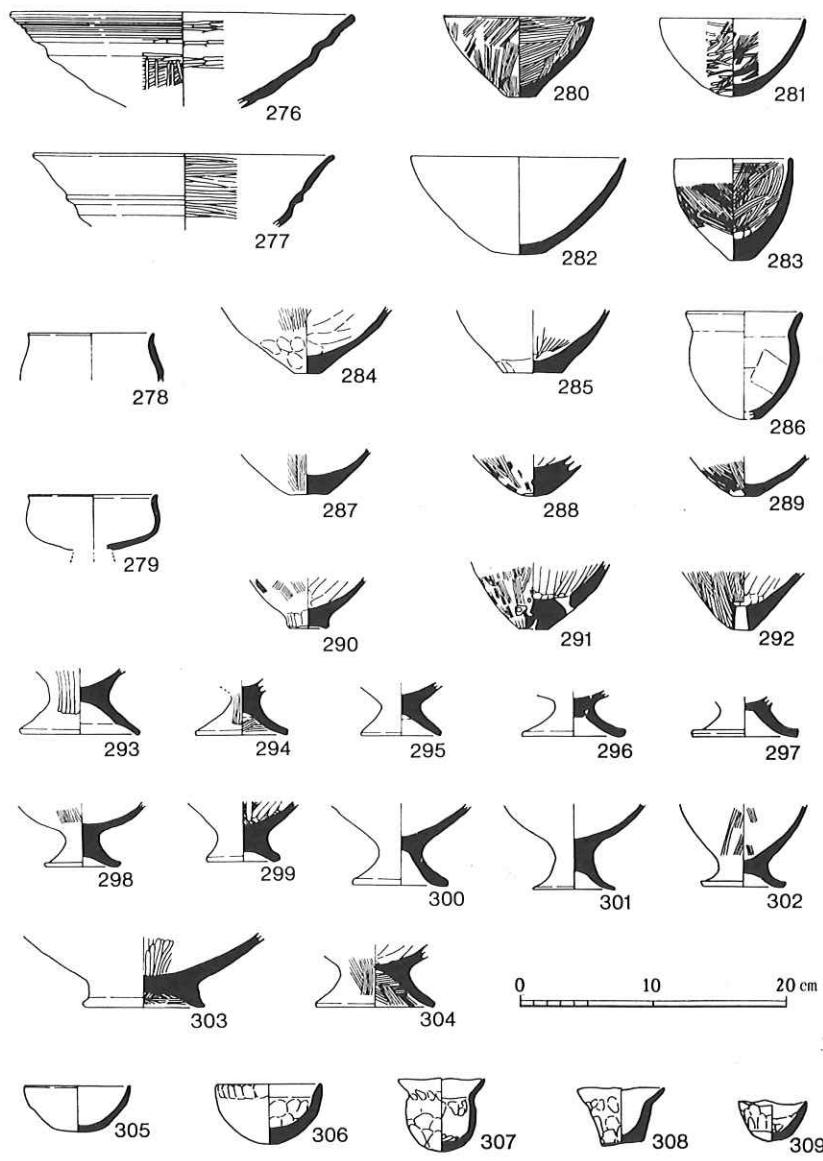


図53 土師器

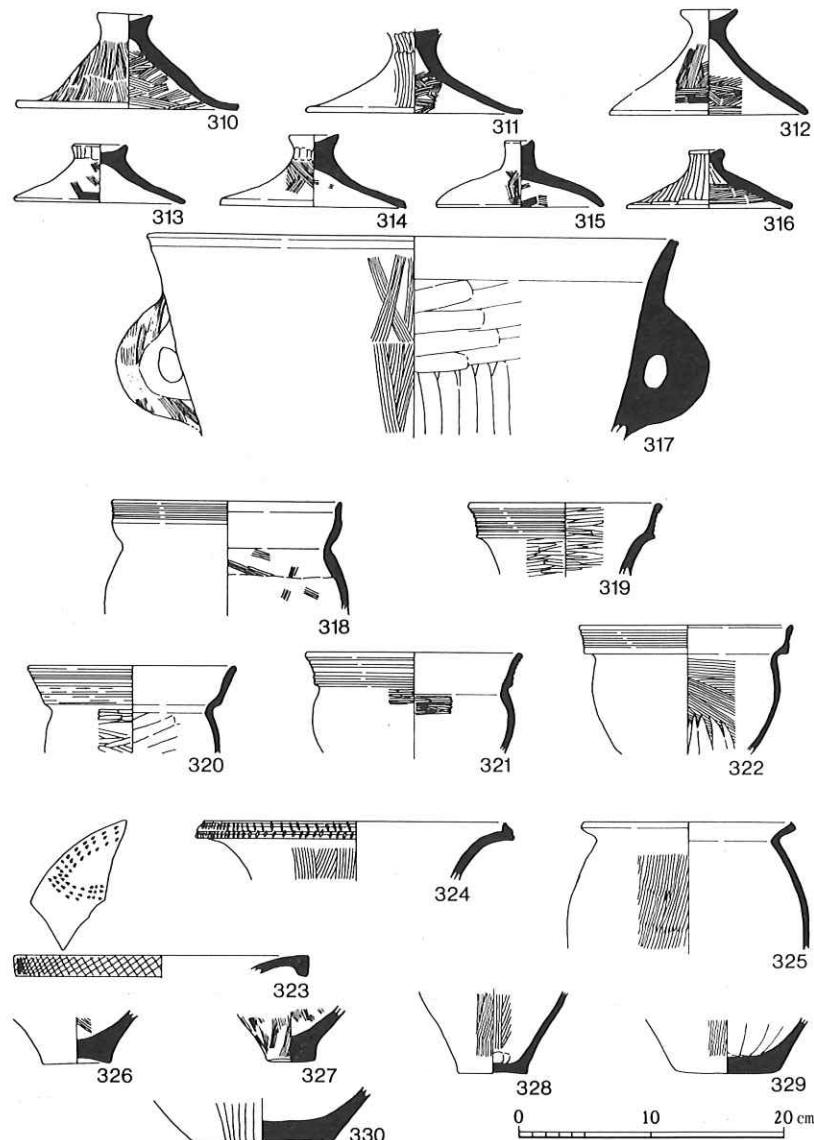


図54 土師器・弥生土器

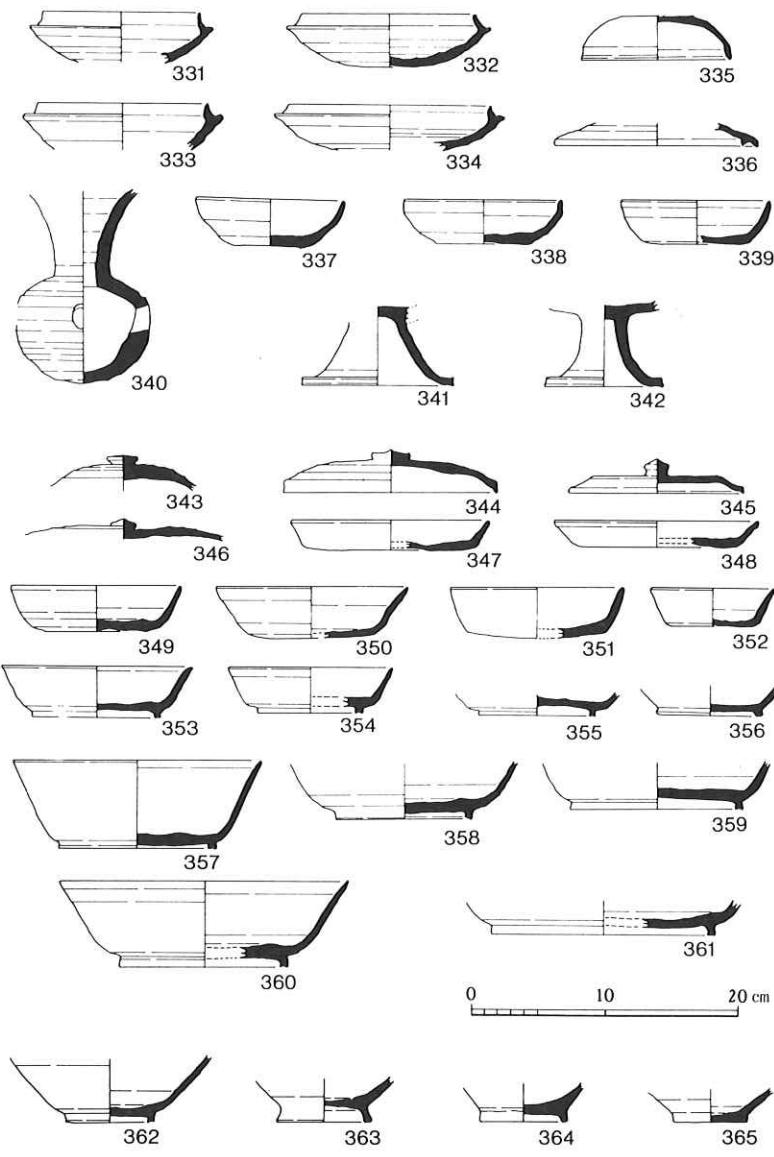


図55 須恵器

11 田多地小谷遺跡

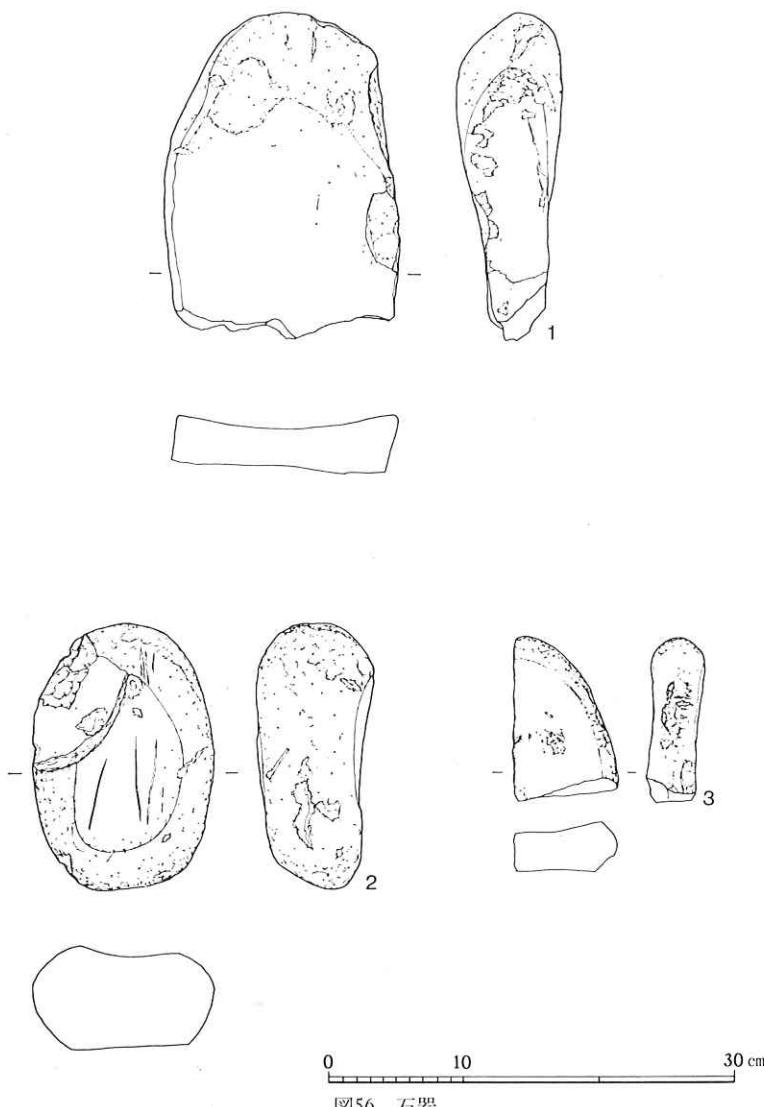


図56 石器